

展示シリーズ19 食虫目 アズマモグラ

やまぐち よしひで
山口佳秀 (学芸員)

「待たせたね。今回はモグラ君たちのことを紹介させてもらおう」

『モグラ君たち』って、僕が自己紹介するのではないのですか？ 山口さん」

(編集者注：今回は「自然科学のとびら」第11巻2号(通巻41号)p.14の展示シリーズ16の続きです。山口さんが、モグラ君に語りかけながらお話は進みます。)

そう、そう。君は「森の開拓者・霊長類」のコーナーに展示されている剥製だけど、同じ1階の展示室にも「恐竜から哺乳類へ」のコーナーに食虫目を代表してアズマモグラの剥製が展示されているのだよ。また、3階のジャンボブック展示室には「歯のはなし」という大きな本の形をしたケースの中にアズマモグラの頭骨標本が2点も展示されているから「君達」と言ったのだ。それからね、ライブラリーの書架にあった比婆科学教育振興会が発行した阿部 永・横畑泰志編「食虫類の自然史」(1998年)という本を読んでいたらモグラに関する面白い記述がたくさんあったので、その内容も踏まえて君達のことを私が紹介するつもりなのだ、いいよね。

日本にはモグラの仲間が6種類もいるのだった

日本の南端、尖閣諸島の魚釣島には、1個体のみが採集されているだけで生態などまったく解っていない「センカクモグラ」、佐渡に「サドモグラ」、越後平野の一部という変わった分布をしている「エチゴモグラ」がいるそうだね。それから、本州の石川県、長野県、静岡県を結ぶ西側には「コウベモグラ」という大型のモグラが生息していて、四国、九州と朝鮮半島及び大陸まで広く分布しているようだ。反対に東側は君達と同じ「アズマモグラ」が生息する地域で関東東地方一帯から青森まで及び、北海道には分布しないそうだ。でも、君達アズマモグラは古くは本州全体に生息していたみたいで、コウベモグラの分布域の中にも、京都や紀伊半島、鈴鹿山系などには、アズマモグラの小さな分布地が残っているみたいだね。その他にも本州の主に山岳地を中心に「ミズラモグラ」も生息していて、6種類のモグラは面白い分布形態をしているみたいだ。

日本の生物相は大陸の生物の影響を



強く受けていて、氷期のたびに大陸から様々な動物が渡来してきたと言われているよね。東日本に広く分布するアズマモグラは、今から300万年前とも言われているみたいだが、大陸から九州に進入し、ミズラモグラなどの古い種を駆逐しながら東進を行い、その結果、ミズラモグラは本州の山岳地に孤立個体群として遺存的に残ったと考えられているようだ。その後、15万年前ごろ大型のコウベモグラが九州に進入し、平地や低山帯に生息していたアズマモグラを駆逐し本州の中部まで進んできたところが現在の分布域のようだね。

はじめは君達がミズラモグラを駆逐し生息域を拡大したみたいだけれども、今はコウベモグラに追われる身になってしまったのだね。長野県の本曾川流域と天竜川流域でアズマモグラとコウベモグラの分布境界線の出来事を調査した報告も載っていたよ。それによると本曾谷では水田、耕作地など土壌が比較的深く軟らかな環境下では14年間に3kmもアズマモグラを排除し、コウベモグラの生息域が拡大したようだ。一方、天竜川上流では、土壌がとても堅い峡谷部で少なくとも30年間も変化が認められなかったようだ。でも、最近の研究によると、この峡谷部を突破したコウベモグラが4年間で16kmも分布を広げたという報告があるよ。地下生活するモグラにとって土壌条件の良し悪しは分布に大きな影響をおよぼすようだね。

仙石原のコウベモグラはどこから来たの

そういえば、1975年に箱根の仙石原で君達の強敵コウベモグラが捕獲され、県内で初めて生息が確認されたよね。当時、強羅公園の園長だった田代道彌さんが箱根のモグラを調査され、「箱根にただ1箇所、仙石原に入ったコウベモグラは黄瀬川流域からもろに箱根古期外輪山の外側斜面を直登した。稜線に

沿って北進すれば乙女峠を経て金時山に達するが稜線を超えるとカルデラ内壁を一気に下降し仙石原に到達し、コウベモグラの分布東限線を拡大した」と報告している。

そこで、私はモグラの造るトンネルの大きさを調べ、箱根のモグラの分布調査を行ってみたのだよ。その結果、西側外輪山の長尾峠一帯、湖尻峠、箱根芦ノ湖展望公園一帯、山伏峠一帯などの稜線はアズマモグラの生息地で、コウベモグラは仙石原だけに孤立個体群として生息していることが解ったのだ。だから仙石原のコウベモグラは自力で箱根の山を越えたのではなく、人為的に持ち込まれたのではないかと考えたわけ。それでね、どこから来たのか考えてみたのだ。1881年に須永伝蔵さんらによって耕牧舎が設立され、仙石原の開拓事業が開始されたというけれど、当時の仙石原は酸性の火山灰土で気候は多湿、冬期は寒気強風の悪条件で牧草栽培には適さなかったようだね。そこで須永さんは酸性土壌の土地改良を行うために石灰と共に有機肥料(牛糞堆肥)を投入したのではないかと考えてみたのだ。堆肥の集積場はカブトムシの幼虫やミミズなどの宝庫だよ。搬送のために菰俵に詰め込まれた堆肥の中に、偶然に紛れ込んだ妊娠したコウベモグラが馬の背に乗って箱根峠を越え仙石原に着いたのではないかと考えたわけ。

その牛糞堆肥は何処から来たのか？が問題になるよね。伊豆国の田方郡丹那村では江戸時代より馬の生産が盛んな地域で、すでに1877年には旧名主の川口家では10頭の乳牛を飼育し、痩せた農地を肥沃にする目的を持ち牛糞堆肥を作り出していたようなのだ。

静岡県函南はコウベモグラの分布東限の生息地域でもあり、川口家に対して須永伝蔵さんは乳牛の飼育方法と牛糞堆肥の譲り受けをお願いしたのではないかと両者の関係について調べているのだけれども、行き詰まりの状況なのだ。モグラ君、何か知っている事があったら私に内緒で教えてよ、お願い。

いけない、また、紹介するスペースが無くなってしまった。